

美砂呼さんと俳句

石川 美智子

神田日勝夫人美砂呼さんの俳句を初めて目にしたのは昭和五十八年の水原帯七月号の支社便りの欄であった。

乳房裂く朝の戦いレモンを切って

鈴木光彦編集長歓迎の句会が彼女のお宅で開かれた時の句である。入社したばかりの私にどうして理解できないなりに強く印象に残っている。終刊・解散を前に水原帯元同人の彼女に一度お会いしたいと思つた。彼女は未だ俳句を続けているのだろうか。鹿追町に向かつたのは十月末の秋晴れの日であった。

連絡を取らせて頂いていたお陰か大変快く迎えて下さった。玄関を上ると一枚の色紙が目に飛び込んで来た。

ペンギンよ俺には鳥打帽子しかない

南利一さんの話から山陰主宰、伊藤富男さん等水原帯の方々の活躍ぶりなど話を

が尽きることがない。初対面であることもすつかり頭から離れていた。数多の色紙短冊も嬉しく拝見させて頂いた。彼女は水原帯や鹿笛俳句会を退社し今は自由に俳句を作り地元の文芸誌に発表を続けている。句会で共鳴を集めることに拘る事から自身を開放したかったのだと言う。

「春が来て花が咲いて…」のような俳句は嫌い。飾らなくていい。口からふつとこぼれた言葉が俳句になる。作りたいように作る、そんな水原帯の俳句が今でも好き」

そう言いながら次の句を語んでくれた。

集団で枯葉が泳ぐ村に生く
彼女の俳句觀とその熱量の高さに引き込まれていた。つい長居をしてしまった。

「時間なんてもともと無いのよ。時間は人間が勝手に決めているだけなんだから」確かにそれまでの年月を感じていなかつた。時間は無いのである。

「日勝とは他人です」と彼女は茶目っ気たっぷりに笑う。夫婦というより同士として画家神田日勝と美砂呼さんは書き合つて今も一人で生きているのだろう。

美砂呼さんの強さを思った。水原帯という結社のもとに集まっていた私達。沢山の事を学んできたはずである。そろそろそこから飛びだしていく時期がきたのではないか。俳句はどこでも出来る。美砂呼さんが俳句と歩いているのを見てその思いを強くした。

それぞれの胸の中にある水原帯を抱いていれば結社が無くなつても水原帯は無くならない。

美砂呼さんとお会いしたようにまた皆さんともお会いできると信じてゐる。

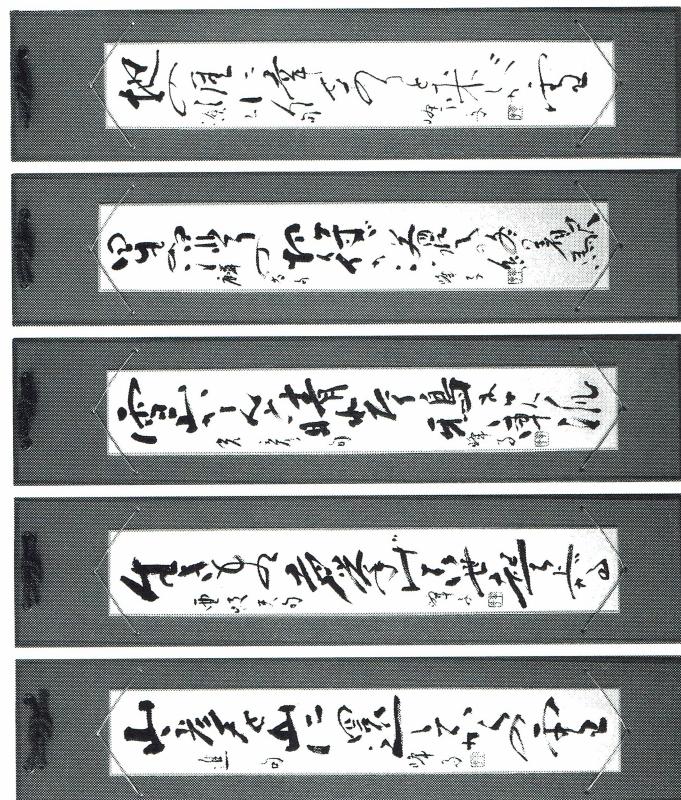
終刊・解散を前に美砂呼さんを思い切って訪ねて本当によかつた。感謝の気持ちで一杯である。

ありがとうございました。さようなら。



◇ お知らせ

解散・終刊記念品として栞を同封いたしました。



安斎峰子氏揮毫による水原帯俳句会

五代主宰代表句

◇ お詫び

七十二年間にわたり水原帯誌の編集と発行に携われた先輩諸氏に心からお詫び申し上げます。

岡本順子
小山田伸道
菊地後之
清川昌比露
黒田さち子
鹿岡真知子
原田昌克
石川美智子

一〇一九・十一・十六

編集委員一同